

インドネシアの近代美術と美術教育について

福田隆眞・佐々木宰*

Modern Art and Art Education in Indonesia

FUKUDA Takamasa , SASAKI Tsukasa *

(Received September 26, 2014)

はじめに

本稿は日本学術振興会の科学研究費補助事業に基づく研究の一部である（注1）。筆者は既にインドネシアの美術教育については「インドネシアの中学校美術教育の教材について」等を公表している（注2）。インドネシアは多民族多文化国家であり、特に美術文化に関しては長い歴史と多様な美術表現を有しているので、美術教育のためにインドネシア美術としての共通性や規範を定めるのが困難であるという理由もあり、教材に採りあげる美術については多様な表現にならざるを得ない（注3）。

インドネシアの美術に関する書籍は歴史的な紹介が多い。例えば、“INDONESIA ART Treasures of the National Museum Jakarta” (Periplus Edition 1998) では、ジャカルタの国立博物館の収蔵品の解説で、宗教美術作品と伝統工芸作品が主となっている。また、伊東照司の『インドネシア美術入門』（雄山閣 1988）もジャワ島の宗教美術遺跡の紹介をしている。そこで本稿では、現在のインドネシアの美術教育と関連させて、インドネシアの美術の長い歴史の中から近代以降の美術表現を採りあげて解説する。近代以降の美術教育は主として創造性の教育を目的とし、同時に美術文化の理解、伝統文化の継承などが含まれている。アジアの美術の特徴として、手工芸や宗教に関わる美術がある。これらは近代化、グローバル化している現在のアジア地域においては、創造性の育成の対象よりも美術文化の理解の対象となっている。そこで本稿は近代以降の美術表現の絵画、彫刻を主として、創造性の育成を目的とする美術教育のためのインドネシア美術の状況を述べる。

1 インドネシア美術の多様性

インドネシア美術は前述のように手工芸、宗教美術、考古学的内容を含めて長い歴史を有しており、極めて多様性を有している。しかし現在のインドネシアとしての国家の形成の基盤となった地域や歴史からインドネシア美術を規定すると、その多くが西洋からの影響による表現と伝統的要素を有する美術表現、そして現代美術があげられる。そして民族や独立までの歴史による多様性を有している。本章では、Hilda Soemantri の Indonesian Heritage Visual Art

*北海道教育大学釧路校

に基づいて、近代以降の美術表現の多様性を図版とともに、その概略を述べる（注4）。

（1）視覚的伝統の要素

原始時代から表現され美術表現と見なされるものには考古学的内容がある。それらは土偶であったり遺跡であったりする。さらに宗教の流布によりインドネシアの地にはヒンズー教、仏教が影響を及ぼしている。それに伴い中国からの影響による工芸品がある。そして14世紀になるとイスラム教が流布する。その後17世紀には西洋諸国の植民地化によって西洋文化の影響が始まる。

（2）インドネシア元来の美術表現

インドネシアの地に元来存在していた美術表現として、記念碑的な彫刻、籠細工、陶芸、木工、植物細工、ワヤンクリ、ガラス工芸などがある。図1はインドネシアの伝統的工芸の一つであるワヤンクリである。ワヤンクリは影絵として上演されるものもあるが、絵巻物のように原画を見せるものもある。伝統的に継承されて1940年代には新たに再生されて今日まで続いている。元来中部ジャワの伝統文化であるが、インドネシアとしての文化の一つとなっている。

（3）近代美術の始まり

近代美術の始まりは他のアジア諸国と同様に西洋美術の導入によってもたらされる。その始まりとされるのは19世紀後半のラーデン・サレ（Raden Saleh）である。ロマンチックな貴族様式の美術表現を齎した。その後、自然主義の表現も始まり、1938年には PERSAGI (Persatuan Ahli-Ahli Gambar Indonesia：インドネシア美術家協会)、1942年には POETERA (Poesat Tenaga Rakyat：市民活動センター) が設立された。また1942年の日本が統治した時には Keimin Bunka Shidosho が設立されアジアの文化の創造の場とされた。

1945年以降、インドネシアの美術界にはいくつかの文化団体が設立された。LEKRA (Lembaga Kebudayaan Rakyat:国民文化協会)、LKN (Lembaga Kebudayaan Nasional:国家文化協会)、LESBUMI (Lembaga Seni Budaya Musurim Indonesia：インドネシア・イスラム教美術文化協会)、(LEKRINDO (Lembaga Kebudayaan Kristen Indonesia：インドネシア・クリスチャン文化協会)、LKIK (Lembaga Kebudayaan Indonesia: インドネシア・カソリック文化協会)である。こうした文化団体がインドネシアの近代美術と美術教育の発展を促した。

（4）アカデミーの側面からの近代美術

1947年以降、インドネシアにはバンドン工科大学をはじめとして高等教育の美術教育機関が設立される。バンドン工科大学の美術学部、ジョクジャカルタのインドネシア美術大学、ジャカルタのジャカルタ美術大学（図2）である。バンドン工科大学は抽象表現の発生地とされており、抽象表現や象徴表現が追究された（図3、4）。またバンドンでは比喩的な絵画表現の追究も行われた（図5）。一方、ジョクジャカルタでは一時的にインドネシアの首都であったことから、独立後も、芸術家が政治や社会問題に関わり、大衆的で伝統的文化と結びついた主題の追究が見られる。そのことに起因して、表現主義的な絵画や比喩的な表現絵画（図6）、装飾的絵画（図7）が追究された。ジャカルタは首都として独立後発展を遂げ、1970年にはジャカルタ美術大学が設立され表現主義の絵画（図8）が追究された。またそれだけではなく首都の役割として美術館、博物館、ギャラリーなどが設立され現代美術の発展と伝統文化の調和が図られている。

（5）表現媒体の追究

社会の近代化、現代化による美術表現では表現媒体の広がりがある一つの特徴となっている。インドネシアにおいても、民族が有している歴史と文化を基盤として、美術と美術教育の近代化

が始まった。そこには美術表現の多様な媒体が活用されている。例えばアニミズムの表現や幾何学的表現の彫刻のための木、金属、石であったり、グラフィックのための印刷、版画であったり、染織のための繊維（図9）であったりする。さらに伝統的な陶芸、現代的な写真、映像などが表現媒体として用いられてきている。

(6) 新しい現代美術の動き

1970年代以降、アジア諸国においても現代美術の追究が始まった。特にインドネシアの隣国のシンガポールにおいては、国家の設立が新しいこともあり、2000年以降は現代美術への志向が強化されている。インドネシアやマレーシアには各地域の民族が継承してきた伝統文化が存在しているので、美術文化もそれらを基盤としている傾向にある。そのような状況から、世界のグローバル化、インターナショナル・スタイルの流布などによって新しい美術表現が追究されている。現代美術の動向では、既存の美術への反論や視覚美術の再定義などが行われている。さらに視覚美術の環境の変化による映像や情報の表現が出現している。特にインドネシアは1965年まで、西欧の映画、雑誌、書籍、印刷物の公開が禁止されており、ソ連と中国からの社会主義の情報の独占状態であった。そうした社会体制への批判や情報統制への反動なども現代美術の表現の動機となっている。図10は直接的に政治問題を取り上げた作品であり、現代の自由なインドネシア社会の美術表現の一つとなっている。

(7) バリの美術

前述までのインドネシアの美術の動向は、バリ島以外の地域での活動である。バリ島には特別の美術の歴史がある。16世紀にラーマーヤナ等のヒンズー教をテーマにした絵画表現が始まり、1920年代には西洋の影響を受け、遠近法などの表現技法を採り入れて伝統的な絵画の改革を行ってきた。また、彫刻については8世紀を起源として寺院のための木彫が制作され、伝統的表現として継承されてきた。彫刻においても1920年代に表現の改革が行われ、伝統的表現に加えてキュビズムの影響を受けたような作品も出現している。図11は改革後のバリ絵画である。自然と共同体をテーマとして緻密で色彩豊かな表現になっている。さらに図12は現代のバリ絵画である。独立後のジャワ島での美術運動の影響もあり、テーマは宗教的な内容を扱っているが、表現方法は大きく変化している。表現主義や抽象絵画などの要素も取り入れた新しい表現を追究している。

(8) 現代美術の動向

現代の美術活動は広がりを見せ、制作・生産も美術市場も大衆化も進展している。美術活動を支えるスポンサーも規模が拡大している。図13はスカルノ元大統領のコレクションである。政府や要人が美術作品の収集・保護を行い、インドネシアの美術文化の発展に寄与している。また、ジャカルタ、ジョクジャカルタをはじめとする大都市においては屋外彫刻やレリーフ作品が多数設置され、美術作品とともに歴史的内容を民衆に披瀝している。美術の大衆化という点では、高等教育機関の増大、民間ギャラリーの増大などによって、制作、発表の機会が増大している。

2 バリ絵画の独自性

前章ではインドネシアの多様な美術表現について概説をした。現在のインドネシアの美術において特徴的な内容として2つが考えられる。一つは独自に開発、継承してきたバリ絵画であり、もう一つは近代以降の西洋の影響による美術表現である。ここではその一つ目のバリ絵画

について概観する（注5）。

図14はバリ絵画の草創期の作品で、カマサン村での作品である。主題はラーマーヤナ等の物語やコミュニティーの生活の中での地震の予想や自然の兆候、日食、月食についてなどである。素材は伝統的に染料によるもので、表現技術は精密で制作には忍耐を要するものである。技法の工程は次のようになっている。①木炭によるスケッチ、②尖った竹の黒ペンによるスケッチの明確化、③柔らかい色から激しい色へに筆による彩色、④輪郭線による形の明確化、である（注6）。

1935年にはウブド村においてバリ絵画の制作が進められてきた。表現媒体の改革が行われ、キャンバスや自作の画布に油絵具や水彩絵の具、アクリル絵の具などによる表現が行われた。図15のように題材は伝統的なコミュニティーを緻密な描写によって表現している。その技法は、①鉛筆によるスケッチ、②尖った竹の黒ペンによるスケッチの明確化、③明るい部分から暗い部分へのグラデーションの作成、④グラデーションに色彩の追加、⑤明るい印象のために白、黄色のアクセントの追加、である（注7）。

さらに1960年以降は若い画家が活躍し始め、主題はコミュニティーの生活によるが、表現が自由になり、形の単純化、鮮やかな色彩の使用、黒や白での縁取りといった新しい技法を導入している（図16）。表現技法は、①キャンバスに鉛筆でスケッチ、②油絵具で彩色、③黒と色による輪郭線の追加、である（注8）。

これらの特徴的なバリ絵画のほかにバトユアン絵画がある。これは古典的な様式で黒や白を強調し、装飾的なパターンを強調するものである。主題は神話、民話からくるものである。表現技術は立体感を意識しており、次のようになっている。①鉛筆でスケッチ、②ペンによる黒インクのスケッチ、③色彩による遠近感表現、④陰影によるボリュームの表現、⑤白色を追加し対象の強調、である（注9）。また、現代ではアカデミックグループも出現しており、従来のバリ絵画とはテーマも素材も異なっている。主題はバリのコミュニティーを対象としているが、表現には、自然主義、抽象派、印象派、表現主義等の西洋の近代美術の表現技法を導入している。

3 西洋の影響による絵画

現在のジャカルタのバタビア地区にはインドネシア絵画と陶芸美術館が開設されている。そこには近代のインドネシアの美術、特に絵画を中心に収蔵展示がなされている。そして2010年には収蔵作品の解説書も刊行され、現代の美術教育に重要な資料となっている。

この資料を基に、本章では現在の美術教育に最も影響を与えている近代現代の美術について、主に西洋の影響による内容を解説する（注10）。

近現代の美術は西洋美術を基盤としており、それらはギリシャ、ローマ、キリスト教の影響を多く受けている。そしてインドネシアにはオランダが植民地時代にそれらの美術文化を齎した。近代美術との関連で西洋美術のインドネシアの影響を3つの時代区分で述べられている（注11）。（1）開拓期、（2）美しいインドネシア時代、（3）インドネシア美術家協会、である。以下はそれらに従って概要を述べる。

（1）開拓期

19世紀から20世紀初頭にかけて、中央ジャワのラデン・サレ（Raden Saleh Syarif Bustamen 1807-1880）がロマン派の美術表現をインドネシアにもたらした。彼はヨーロッパ

で美術に関する教育を受けた初めての人であった。そして、これがインドネシアの近代美術の発展における分岐点であった。

さらに、1902年、オランダの統治政府はバタビア美術連盟を設立した。それはたびたび、ヨーロッパの絵画の展覧会を企画し、画家たちに一歩踏み出すための勇気を与えた。

(2) 美しいインドネシア時代

この時代の絵画の様式はバタビア美術連盟によって紹介されたヨーロッパの絵画から多大な影響を受けている。絵画のテーマは一般的に、インドネシアの美しい風景が描かれた(図17、18)。これらは理想主義に基づいて行われ植民地時代の美術家の努力の成果であった。

(3) インドネシア美術家協会

インドネシア美術家協会はインドネシアでの初めての美術家の組織であり、1938年10月23日にジャカルタで創設された。これはインドネシアの美術の発展を目的としており、インドネシアの様式を探っていた。この組織はオランダ統治時代の終わりである1942年まで続いた。

組織のメンバーはエミリア (Emiria Soenassa, RGA. Sukirno) とオットー (Otto Djaya,) である。エミリアは初めてのプロの女性画家で、彼女はインドネシアの画家たちに、自らの絵筆を振って古い技術を捨て去るために勇気を出すべきだ、という考えを奨励した。そして、数人の画家が彼女の考えに賛同した。

以上の3つの時代区分が近代美術がインドネシアにもたらされて、日本が1942年に占領するまでの活動の概略である。

4 日本統治以降の美術活動

1942年の日本統治の開始から、インドネシアの美術は西洋からの影響に加え、日本からの影響もたらされた。そして独立後はもっと広い世界からの交流も始まり、インドネシアの近代美術が現代美術へと引き継がれるのである。以下には日本統治時代からの変遷を概略する。

(1) 日本統治時代

1942年、日本はケンミン文化指導所という文化機関を数人の日本人芸術家の監督下のもとに設立した。アグス (Agus Djaya Suminta) は絵画部門の首席として位置付けられた。この施設は、訓練のための予算、共通の活動のためのスペース、インドネシアの大都市での展覧会を開くための予算を提供した。ここでの成果の一つとしては、インドネシア独自の絵画表現が試行されたことである。図19のようにインドネシア社会を直接の主題として表現するものも現れた。

(2) 革命と美術

日本統治終了後、各地に美術団体が設立された。1945年にメダンでインドネシア美術協会 (Angkatan Seni Rupa Indonesia) がイスマイル (Ismail Daulay) とナシヤ (Nasyah Jamin) が中心となって設立された。1946年にジョクジャカルタのアファンディ (Affandi) が美術家協会 (Seniman Masyarakat) と呼んでいたものである。その後、名前をインドネシア若手研究会 (SIM: Sanggar Indonesia Muda) と変え、スドジョノ (S. Sudjojono) を代表として、アファンディ (Affandi)、ヘンドラ (Hendra Gunawan)、スダルソ (Sudarso)、などがメンバーとなった。その後、1948年にバンドンで「ムクティ精神」(Jiwa Mukti) と呼ばれる協会や1955年にジャカルタで「マタハリ協会」が設立された。多くの類似した協会がソロ、マラン、スラバヤ、ウジュン・パンダンなどに設立された。多くは現実主義、印象派、表

現派の美術表現を追究する団体であった。

(3) 美術アカデミーと大学の時代

1947年、ジョグジャカルタにインドネシア美術アカデミー (ASRI: Akademi Seni Rupa Indonesia) が設立された。それは1950年に州より高位の教育機関に公式に登録された。

1950年ごろのバンドンでは、高等美術教育教員養成学校 (Perguruan Tinggi Seni Rupa) という教員養成の教育機関が開設され、のちにバンドン工科大学の美術部門になった。

1960年には国立美術アカデミーがジャカルタに開設された。1964年に教員養成学院 (IKIP: Institut Keguruan Ilmu Pendidikan) が工芸と美術部門のひとつとしてジャカルタに設立された。そして、1997年には美術部門が設置され、のちにジャカルタ州立大学となった。1965年ごろには、バリウダヤナ大学に美術部門が設立された。1967年にはスラバヤ美術アカデミーがスラバヤの画家によって設立された。1971年にはジャカルタ美術教育協会が設立された。このように独立後に多くの美術団体や高等教育機関が設立され、インドネシアの近代、現代の美術活動と美術教育が進展した。それらではグローバル化に伴って多様な美術表現の追究がなされてきた。図24から図30までのように、フォーヴィズムや抽象表現、素朴派、アンフォルメル等、第二次世界大戦後に世界中で広がった様式の変遷を辿っている。

(4) ジャカルタ生の中国人画家

1955年頃、中国の画家たちはジャカルタ北部の街で、中国人画家の協会に結集した。メンバーはインドネシア在住の18歳以上の市民権上で差別されていない中国人であった。この組織は定期的に展示会を開いた。表現様式は伝統的な中国のものと現代のもの両方であった。中でもリー・マンフンは図31のように現代的な表現による特徴を捉えた人物、人体の作品を制作した。このグループは1965年の10月末日に自発的に解散した。

5 美術教育との関連

現代の美術教育は創造性の育成を主目的としている傾向にある。それは19世紀の中葉から写真技術の発明と油絵具の携行が簡便になったことによって、絵画の記録的役割から自由な表現へと移行することによって出現してきた。19世紀後半の印象派はその始まりであり、以後、20世紀を通じて、多様な美術表現がなされてきて現代に至っている。また、20世紀初頭には産業の発達によるデザインの振興にともなって、美術教育に新たに創造性を要する分野も出現してきた。そして現代の情報や映像による表現、メッセージ性の強い現代美術の発達など、美術と美術教育は21世紀になって新たな広がり局面を有してきている。

こうした現代の状況の中で、前章までにインドネシアの近代の美術と美術教育の変遷について概略してきた。アジアの美術の起源は各地に発生した工芸と宗教美術によるものが多い。それらの基盤に西洋文化が影響を及ぼし、技術技法、表現媒体がアジアにも齎された。アジアでの初等教育から高等教育までの美術教育は西洋文化の流布にともなって整備されてきたと言える。美術教育を取り巻く状況はグローバル化にある。この状況において民族や地域、国家といった特定の集団の伝統文化の存在が、現代における美術教育の内容を担っている。西洋文化の影響によるグローバル化と伝統文化の調和が教育内容を規定する。

インドネシアの美術教育において、初等中等教育では、多様な美術表現の受容、表現分野の造形能力の育成、美術文化の理解等を通して、創造性の育成、公平さや鍛錬を尊重する態度の育成、責任感、関心の育成等の人間形成が目的とされている。高等教育においては美術作品の

創造と研究、教育が目的となる。その教育課程には、インドネシア独自の美術文化とグローバルな視点での美術表現の理解と育成が存在している。

注

- 1 本研究は科学研究費助成事業によるものである。研究代表者：福田隆眞、研究分担者：佐々木宰、課題番号：基盤研究（C）24531136、平成24年度～平成27年度、研究題目：アジアにおける美術教育の文脈研究
- 2 以下を公表している。
福田隆眞、佐々木宰、「インドネシアの中学校美術教育の教材について」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第36号』収録、2013
福田隆眞、「インドネシアの教員養成における美術カリキュラムについて」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第9号』収録、1998
小平征雄、福田隆眞、「インドネシアにおける陶芸とその教育についての調査」『北海道教育大学紀要』一部C 教育科学編48（1）、1997
福田隆眞、佐々木宰、「インドネシアの美術教育における学習指導要領の位置づけについて」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第8号』収録、1997
福田隆眞、佐々木宰、「インドネシアにおける美術教育のカリキュラムと実践」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第8号』収録、1997
- 3 1995年8月調査において、教育省の小学校教育担当者の Sediono 氏は、教科書の出版についての問題の一つとして述べている。
- 4 Hilda Soemantri, *Indonesian Heritage Visual Art*, Archipelago Press, 1998においては宗教美術、伝統的手工芸についても述べているが、ほとんどは西洋の影響後の近代美術を開発している。本稿ではインドネシア美術の概略的な変遷を述べるので、個々の作家や作品についての詳述は略して、別の機会に行う。
- 5 以下の文献に基づいて解説する。Drs. H. Dadang Udansya, *Sejarah Perkembangan Seni Rupa di Indonesia*, Musium Seni Rupa dan Keramik, Dinas Pariwisata dan Kebudayaan, Provinsi DKI Jakarta, 2010
- 6 前掲書5、pp34-35
- 7 前掲書5、pp36-37
- 8 前掲書5、pp37-38
- 9 前掲書5、p.39
- 10 前掲書5に基づいて述べる。
- 11 前掲書5 p.45

図版出典

- ・ 図1～13 Drs. H. Dadang Udansya, *Sejarah Perkembangan Seni Rupa di Indonesia*, Musium Seni Rupa dan Keramik, Dinas Pariwisata dan Kebudayaan, Provinsi DKI Jakarta, 2010
- ・ 図14～31 Museum Seni Rupa dan Keramik DKI Jakarta, *Koleksi Lukisan dan Patung*,

2010

参考文献

- Drs. H. Dadang Udansya, *Sejara Perkembangan Seni Rupa di Indonesia*, Musium Seni Rupa dan Keramik, Dinas Pariwisata dan Kebudayaan, Provinsi DKI Jakarta, 2010
- Hilda Soemantri, *Indonesian Heritage Visual Art*, Archipelago Press, 1998
- Museum Seni Rupa dan Keramik DKI Jakarta, *Koleksi Lukisan dan Patung*, 2010
- Museum Seni Rupa dan Keramik DKI Jakarta, *Katalog Koleksi Lukisan Pilihan*, 2009

☒



図1 ワヤンクリ (影絵)

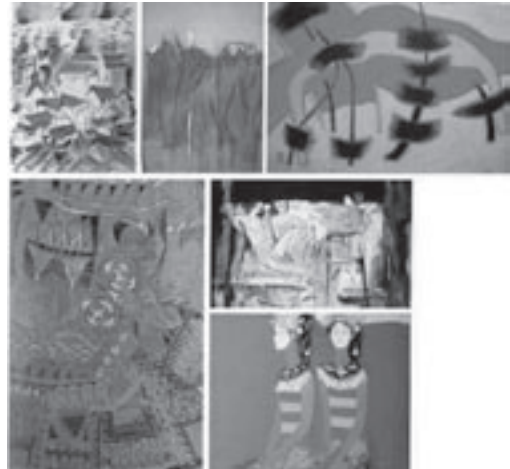


図2 ジャカルタ芸術大学

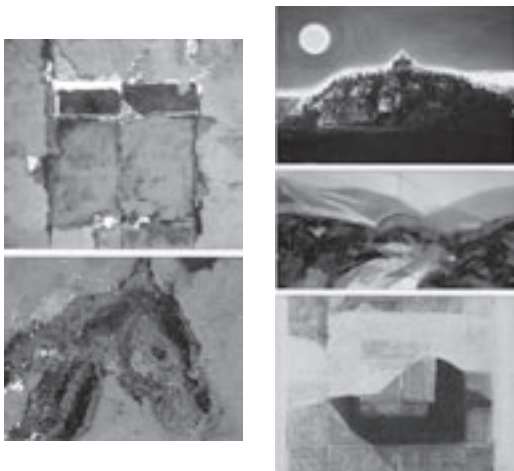


図3 バンドンの抽象表現

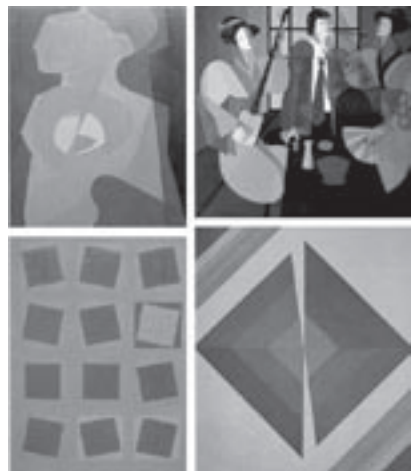


図4 バンドンの純粋表現

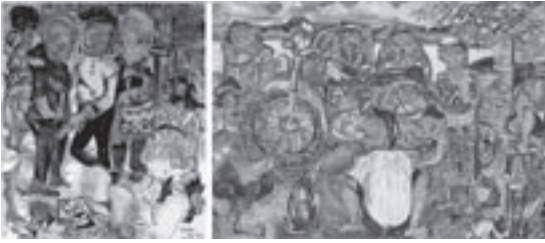


図5 バンドンの比喩的表現絵画



図6 ジョクジャカルタの比喩的表現



図7 ジョクジャの装飾的絵画

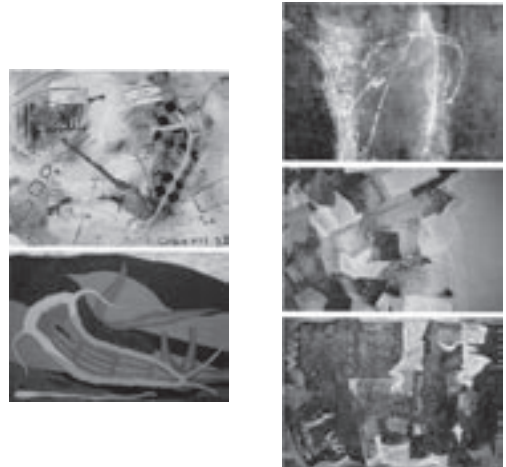


図8 ジャカルタの表現主義



図9 織物



図10 インドネシアの現代美術

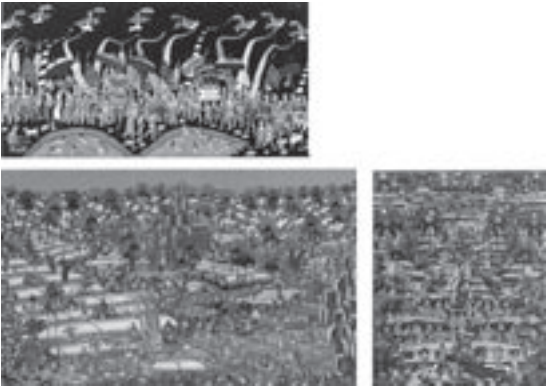


図11 バリ絵画

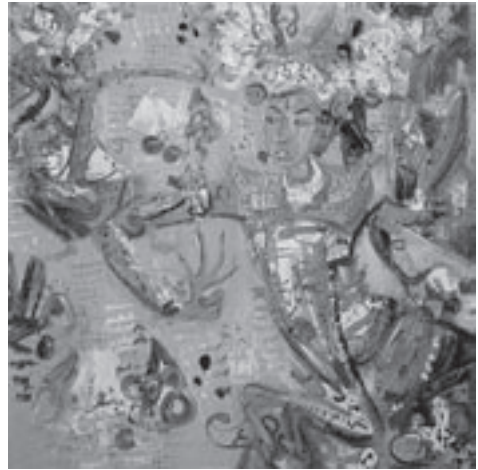


図12 現代のバリ絵画



図13 現代のインドネシア絵画スカルノコレクション



図14 バリ絵画草創期「ガルード」



図15 バリ絵画「祝福の依頼」



図16 若い世代のバリ絵画「供物」



図17 西洋美術の影響「村の集会所」



図18 西洋美術の影響「風景」



図19 ヘンク・ンガトン「アーチェリー」



図20 ナジャ・ジャミン「ゲリラ」



図21 スドジョノ「プランバナナ」



図22 ワキジャン「二匹の魚」



図23 ダダン・ウダヤナ「親戚」



図24 アバス・アリバシャ「中国寺院」



図25 ムリヤド「母と子」



図26 ポポ・イスカンドル「猫」



図27 スリハディ「植物園」



図28 アリ・スミス「午後のひととき」



図29 ジェハン・スクマントロ 「婦人」



図30 サルナディ・アダム 「未来を見つめて」



図31 リー・マンフン 「機織り」